

題目:特別養護老人ホームにおける介護過程の展開プロセスに関する研究

—個別ケアの支援を中心に—

保健医療学専攻・先進的ケア・ネットワーク開発研究分野

氏名:増原 真砂子

キーワード:介護過程、個別ケア、自立支援、排泄介助、役割

1、はじめに

特別養護老人ホーム(以下特養ホーム)の、介護職員は施設の理念や方針にしたがい、介護過程を行う。利用者は身体障害や認知症状が見られ、身体・精神・社会的な自立が損なわれやすいことから、個別ケア、自立支援を重視することが求められている。しかしながら、実践される日々のケアは、画一的になりやすいことが課題とされている。その要因には介護過程の展開プロセスに課題があるとされる。

2、目的

本研究では、介護過程の現状と課題を明らかにし、介護過程のあり方に1つの示唆を得ることを目的に2つの調査を実施することとした。[研究1]では質問紙調査から、介護職員が実践する介護過程の各プロセスがどのように実践されているのか、またどのようなことに疑問やジレンマを感じているのか明らかにする。[研究2]では面接調査から、施設は介護職員が実践する施設介護をどのように感じているのか、それを妨げる要因はどのようなものだと感じているのか。それについてどのようにしようと思っているのか、明らかにし、介護過程に影響する要因の全体像を把握する。

3、調査対象及び方法

1)介護過程の現状と課題【研究1】

特養ホームに勤務している介護職員を対象とし、担当している利用者ごとに調査票を複数記入する連記票とした。調査内容は介護職員に関する項目と、介護職員が担当している利用者に関する項目に分かれている。そして、その内容は、それぞれの基本属性に加え、介護職員が実践している個別ケアの頻度、そのケアを通じて感じたやりがい、むなしさについてである。各調査内容の基本集計に加え、個別ケアとやりがい及びむなしさの頻度を分析した。また、やりがい、むなしさの自由記述は類別化した結果を集計した。介護職員が把握する利用者に関する項目については、身体的自立度にはFIM(Functional Independence Measure)、精神的自立度としてVI(Vitality Index)、社会的自立度には社会的状況6項目を利用した。さらに、身体・精神・社会的自立度は、関連する項目の探索的分析をそれぞれ行った。

2)施設が捉えている施設介護の現状と課題【研究2】

特養ホームにおける施設長ら15名に対し、半構造式面接を行い、質的帰納的研究を行った。調査内容は、介護職員に関して「ご苦労されている点について」「専門性について」「今後高齢化社会が進む状況で特養の姿はどうなっていくか」などを自由に語ってもらい、文章を要約し類別化した。

4、倫理上の配慮

本研究の実施に際し、国際医療福祉大学倫理審査委員会を通じ承認を得た(承認番号10-102)。対象施設に、同意文書を得て実施した。

5、結果

1)介護過程の現状と課題【研究1】

介護職員は298名で、男性30代(51.41%)、女性20代(56.12%)がそれぞれ多く、平均年齢32.6歳、勤務年数は平均4.51年であった。介護職員の受け持ち利用者550名で、利用者は男性、女性ともに80代が多く(男:43.57%、女:45.41%)入居年数は5.32年、要介護度3.96であった。

(1)担当利用者実践される個別ケアの頻度について

介護職員は個別ケアについて、日常的に行われる「継続的ケア」(3.18±0.56)、担当者であることを知ってもらい、ケアカンファレンスへの参加など「チームケア」(3.23±0.62)の実践が多い傾向にあった。その一方、利用者が入所したことへの思いや、今後の生活目標について意思確認する「生活を支えるケア」(2.20±0.84)、具体的なケアの内容について意思確認する「プラン作成のためのケア」(2.86±1.02)においてはあまり重視していない傾向が見られた。また、個別ケアはやりがいと関連が見られ、個別ケアの実践頻度が高いほうが、やりがいをよく感じている傾向であった($r=0.42$ 、 $p<0.05$)。

(2) 排泄場所別、排泄ケアの目標と課題の自由記述（ベッド、トイレ）

受け持ち利用者へ、排泄介助を重視している介護職員の目標と課題の記述は、ベッド、トイレの双方に、目標に問題が、課題に目標が記述されているなどの現状が見られた。また、そのやりがいについては、ベッドの方は実施したその場の利用者の反応に、トイレの方は実施に対する利用者の変化に感じていた。

(3) 介護職員が把握している自立度（FIM・VI・社会的状況）と関連する項目の探索的分析

自立度については、排泄場所と役割が関係していた。排泄場所はトイレの群が、ベッドの群よりFIM、VIが有意に高い（FIM:r=0.42、VI:r=0.46）。役割においてはありの群がなしの群より有意に高かった（FIM:r=0.45、VI:r=0.48）。

2、施設が捉えている施設介護の現状と課題【研究2】

集計結果は、15 上位カテゴリー、53 中位カテゴリー、114 位カテゴリーが抽出された。〔国の求める介護を目指す〕ために、施設は介護職員に対し介護従事者としての理想像を持っており、介護方針には排泄の自立を目標にしている施設がみられた。また、【介護報酬の低さ】などから離職や人材不足によりリーダーシップを図ることや、重度な利用者の増加、《医療行為、体制の難しさ》に苦慮していた。しかし介護職員が働きやすいよう体制を整え、《人について学び考える》など教育を重視し、また介護過程の展開プロセスには【アセスメントが重要】、〔介護職員の技術の標準化が課題〕と感じており、このことが専門性を向上させ、介護職員の地位の確立につながると捉えていた。また、介護職員は〔待機者が多い中、地域の介護に貢献したい〕という思いを持ち、今後の課題は【地域と協力し合う】ことと捉えていた。

6. 考察

1) 介護過程の現状と課題

〔研究1〕の個別ケアの実施については、利用者への意思確認など、アセスメントに関連する項目をあまり重視していない傾向が見られた。またこのことは、排泄介助の支援目標と課題の記載状況に影響が見られており、これらの要因にはアセスメント、計画を作成する際に思考過程を言語化することに課題があると考えられ、今後研修などで、教育を強化する必要がある。また、本研究結果より、トイレで排泄し、役割を持っている人が最も自立度が高い傾向にあることから、介護職員は排泄の自立と役割の支援を中心に介護過程を展開することでアセスメント、目標や課題がより明確になるのではないかと考えられる。

2) 施設介護の現状と課題の全体像

施設は介護方針について「排泄の自立支援が最も介護の質、利用者の生活の質と関係している」ことを実感していた。また、施設は介護職員がこの経験から「自信がつき」【やりがいを得る】ようになったと捉えており、施設介護の向上には〔介護職員の技術の標準化が課題〕であり、《技術は経験、意識が重要》と感じていた。一方、介護職員はこのことを意識し、努力はしているが、アセスメントの不足や利用者の重度化、家族の思いなどにより、自立に向けた介護目標を持ちづらい傾向が見られていた。このことが、施設と介護職員との間にジレンマや乖離を生んでいることが考えられる。よって、普段から生活相談員、ケアマネージャーらがスーパーバイザーを行うなど、介護過程を展開できるよう支える必要があると考える。また、このことにより介護職員の介護観が養われ、介護職員の専門性が高まることが考えられる。

3) 総合考察

施設は〔介護職員の技術の標準化が課題〕と捉えていることが分かった。よって、介護職員は「スキルアップを図る」ことを頑張っているが、排泄介助の支援目標と課題の記載状況から〔どう対応していいかわからない・無力感〕を感じる場面もあり、介護過程をよく理解していないと感じていることが伺えた。ここに施設と介護職員との間にずれがあり、介護職員がジレンマを感じていることが考えられる。

8、結論

介護職員は、利用者の個別ケアの実現を目指すその手法として介護過程を行うが、本研究では、この現状と課題を明らかにし、介護過程のあり方に1つの示唆を得ることを目的とした。施設は〔介護職員の技術の標準化が課題〕であると捉えており、教育や研修に力を入れていた。しかし、介護過程の展開プロセスにおいては、目標及び課題の記述に課題がみられた。この現状が介護職員のジレンマを生んでいることが考えられる。介護過程は1つ1つのプロセスを理論的に進めていかなければならないため、この達成の積み重ねが介護職員の専門性を向上させ、この両者が向上することが今後の課題であると考えられる。

9、研究の限界

本研究においては、特養ホームにおける介護過程の展開プロセスの全体の結果として一般化するには十分な結果とは言えない。これらのことは今後の課題としたいと考える。

引用文献 1) 竹内孝仁. 介護基礎学. 医歯薬出版株式会社, 1998:6-17, 28-32, 46-47, 136-153